

爱护劳动力的学说

北基行 記

中国 紹興市 安昌古鎮

労働力愛護の学説

社会の富を創造するものは労働力であり、労働力そのものが最大の富である。それ故、労働力を愛護することは、生産を發展させ、国家を富強に導く重要な施策である。我々の先祖は、早くからこの道理をわきまえていた。

春秋戦国の頃、古代のおもな政治家たちは労働力の重要性をすでに認識していた。もちろん、その頃の人々、特に封建統治階級にある者は、労働力を愛護するといっても、真の意味における労働力愛護ではなく、封建統治においておのれの地位を維持確保する上で、これより都合のよい手段がみつからなかったのである。意外なことに、彼らは統治経験をとおして、いわゆる“民力の活用”の“限界”を見極め、すでに労働力の消長にかかわる客観的法則を発見していたのである。

『礼記』『王制篇』に、“民の力を用いるは、歳に三日を過ぎず”と記載されている。元代の学者陳澧は、“民力を用い、城郭、道路村落、水道、宮廟類の治を為す”と注釈を加えている。これは、現在の言葉になおすと、各種の基本建設に要する労働力である。当時の社会的生産水準から云えば、古人が規定した基本建設に必要とする労働力は、

総労働力の約1%であり、現在からみれば、農業中心の古代国家においては、適当な数字であると言えよう。生産力の向上につれ、このパーセントは変化するが、変化の速度と上昇の比率は、社会経済構成と密接な関係があり、社会体制の変化につれこの比率にも変化が現れる。

また、生産水準の変化がなくても、年によって豊作、平年作、凶作の違いがあり、同一比率で労働力を徴用することは出来ない。『周礼』によると、“豊年は三日、中年は二日、無年は則ち一日のみ”



西安市 郊外農村

の記載がある。これは、豊年における基本建設が占める労働力の割合は、総労働力の約1%であり、平年作では総労働力のわずかに0.6%、収穫無し凶作年では0.3%を占めるに過ぎなかった。

労働力が愛護されると、供出された労働力とそれが創出した社会財産にも、同様に愛惜の目が注がれ、蓄積が奨励された。『礼記』『王制篇』に続いてこの様な記載があり、この観点に重点を置いて説明している。“国に九年の蓄、無ければ不足、六年の蓄無ければ急、三年の蓄無ければ国、その国にあらざると

いう。三年耕せば必ず一年の食あり、九年耕せば必ず三年の食あり。”これは少しオーバーな表現で、古代人が管理する国家すべてがこのように多くの糧食を蓄積したとはかぎらない。しかし、経済思想と学説から云うと、この一連の言葉は注目に値する。農業で「耕三余一」を実現すると、国民経済計画に於いて三年以上の蓄積を保有することであるが、これには重要な意味がある。

この思想と学説に基づいて、齊国の管仲がこのように主張している。“成すべからざる者を為さず、民力を量るなり。”この主張するところは確である。多方面の事情を勘案して、自己の能力で耐え得るか否かを見極め、決して無理をしない。これは、各位が日常生活で体験するごくあたりまえの経験である。

他方、真面目に力を蓄積して、完成が見通せる事業は、全力を以て疾走し、その完成を実現せねばならない。古人にもこのような例がある。晋国の狐偃は公子の重耳に策をめぐらして云った、“蓄力すること一紀なり、以て速くみるべし。”一紀は十二年である。当時狐偃は重耳に随伴して衛国の五鹿に馬を進めており、彼は予言して云った。“十有二年にして、必ず此の土を獲ん。”この時はちょうど僖公十六年であるが、十二年後則ち 僖公二十八年に、晋文公（則ち公子重耳）は言葉通り衛国を討伐し、正月六日にこの地、五鹿を占領した。この故事にみる狐偃のような人は、古代では、蓄積力を測る能力に長けた人であろう。紀元前七世紀は大昔であるが、この時代の人でもこんなことが分かっていたのだから、二十世紀六十年代の我々は、更に明晰にこの道理がわからなくてはならない。

我々は古人の経験を学びそこからアイデアを得て、各方面に労働力愛護の目を配り、各人の労働力愛護精神をとおして、労働成果を大切にすべきではないか。



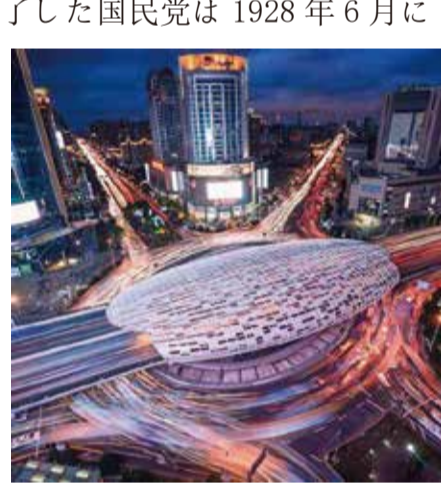
晋文公（重耳）

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

『愛護労働力の学説』ひとそえ

紀元前の古代為政者達が理解していた道理は1960年代の指導者に分かって当然と言いつつ作者の矛先は、性急且つ強引な人民公社化そして大躍進政策を主導して凶作と飢餓に陥れた毛沢東に対して向けられている、それは言わずもがなであり屋上屋を重ねることを控えます。それより30年前、北伐戦争を完了した国民党は1928年6月に首都を北京から南京に移し、一党独裁体制を固め、

経済建設に乗り出します。上海を特別市として租界を東西南北の中山路で取り囲み、西北郊外（現在の楊浦区）に五角場（ペンタゴン）を核とした官庁・



現在の上海 五角場付近

法院・競技場・体育館・プールなどを建設して新都心としました。国民体育大会の記録写真を見たことがあります。その会場となったスタジアムなどの建築様式や道路の名称に、今もなお三民主義の名残を感じることができ

ます。鉄道・道路・電信・郵便の整備、そして幣制改革に乗り出します。高度成長する経済とともに、「教育の普及も目ざましく、就学率や学生数は2倍3倍と厚みを加えていったのである。」（藤井省三『魯迅と世界文学』2020年。152頁より抜粋）

魯迅一家が虹口から南京路へハイヤーを飛ばして、ハリウッド映画を見に行く生活を印税収入で賄えたのも教育の普及、知識人の増加によるものでしょう。

1937年勃発の日中戦争までの戦間期10年の労働力と財を保護し、成長軌道を伸ばせなかった国民党には痛恨の外患でした。一方、共産党にとっては？

井上邦久

爱护劳动力的学说 原文

人的劳动力能够创造社会的一切财富；人的劳动力本身就是最大的社会财富。因此，爱护劳动力是发展生产、使国家富强的重大措施之一。我们的古人，就已懂得这个道理了。

早在春秋战国及其前后的时期，许多古代的大政治家已经知道爱护劳动力的重要意义。当然，那个时候的人，特别是那一班封建统治阶级的人物，并不是真正爱护劳动力，而只是为了取得和维持他们的封建统治地位才不得不如此。但是，他们通过自己的统治经验，却也发现了所谓“使用民力”的“限度”，实际上就是发现了劳动力消长的某些客观规律。

《礼记》《王制篇》写道：“用民之力，岁不过三日。”元代的学者陈澧注解道：“用民力，为治城郭、途巷、沟渠、宫庙之类。”其实，用现代的话来讲解，这就是指的各种基本建设所用的劳动力。按照当时社会的生产力水平，古人规定了各种基本建设所用的劳动力，大致只能占总劳动力的百分之一左右。现在看来，这个比例对于以农业生产为根本的古老国家是适当的。随着生产力水平的提高，这个比例对于当然会发生变化，不过它变化的快慢和比例的高低，与社会经济结构的性质有极密切的关系。社会性质和制度不同，比例也会有很大不同。

而且，即便在同一个生产水平之上，丰收的年和普通的年成以及荒年，也不能按照相同的比例来使用劳动力。所以，《周礼》上又记载着：“丰年三日，中年二日，无年则一日而已。”这就是说，在丰年基本建设占用的劳动力可以达到总劳动力的百分之一左右；平常的中等年景，只能占用百分之零点六左右；没有什么收成的荒年顶多只能占用百分之零点三左右。

对劳动力既然要注意爱护，那末，对于劳动力所支出的劳动以及它所创造的社会财富，同样必须爱惜，注意积蓄。《礼记》《王制篇》还有一段文字，很突出地说明了这个观点。它写道：“国无九年之蓄曰不足，无六年之蓄曰急，无三年之蓄曰国非其国也。三年耕必有一年之食，九年耕必有三年之食。”虽然古人管理的国家未必都有这许多积蓄，这是极而言之；但是，当作一种经济思想和学说来看，这一段话却很值得重视。在农业上实现耕三余一，在整个国民经济计划上保持三年以上的积蓄，这是具有重大意义的。

正是基于这种思想和学说，所以齐国的管仲主张：“不为不可成者，量民力也。”的确，有许多事情必须估量自己的能力是否胜任，决不可过于勉强。这是我们每个人在日常生活中都能体会得到的普通经验。

而在另一方面，如果认真地积蓄力量，估量能够做得到的事情，又必须全力以赴，保证它的实现。古人也有这样的例子。如晋国的狐偃为公子重耳策谋说：“蓄力一纪，可以远矣。”一纪是十二年。当时狐偃伴随着重耳正走过卫国的五鹿，他就预言：“十有二年，必获此土。”当时恰值鲁僖公十六年，后十二年，即鲁僖公二十八年，晋文公（即公子重耳）果然伐卫，正月六日占领了五鹿这个地方。

从这个故事看来，象狐偃这样的人，在古代的历史条件下，总算是懂得积蓄力量的了。纪元前七世纪的古人尚且懂得这些道理，我们生当二十世纪六十年代当然就应该更清楚地懂得这些道理。

我们应该从古人的经验中得到新的启发，更加注意在各方面努力爱护劳动力，从而爱护每个人的劳动，爱护每一劳动的成果。